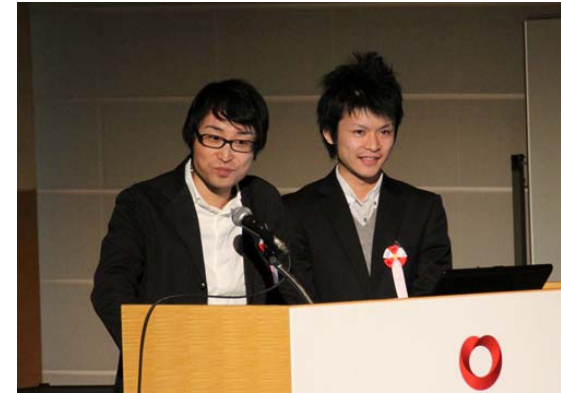




0641 身の丈ハウス

岡山泰士 フリーランス
森田修平 株式会社一級建築士事務所 設計組織DNA



プレゼンサマリー

次世代の夫婦は本質的なものだけを好む。最低限のものを身に付け、身の丈に合った暮らし、身の丈に合った自分好みの家をもつ。家というか棲家に近いのかもしれない。家というよりペットのような感覚かもしれない。標準的な大きさの住宅が建ち並ぶニュータウンにおいて、かつて延床面積40坪程度の建物が建っていた基礎の上にワンルームマンション程度の広さである4坪の家を計画。外部には基礎を利用したウッドデッキを張り、内部は屋根裏のような空間、そして天窗を兼ねた玄関を設える。建物はDIYによって装いを自由に変えていく。

(プレゼンテーションより抜粋)

審査員コメント

- ・土台を全部デッキとし雨風を凌ぐ部分は小さくてよいという考え方は評価できる。でもあまりに閉鎖的。「身の丈」という言葉は住む人をきわめてネガティブにとらえる言葉だと思う。(山本理顕)
- ・映画のようなプレゼンテーションが面白い。人間の描き方も痛快。(藤森照信)
- ・基礎を敷地の一部ととらえ使い続けようという発想は非常によいが、キャンプ生活との違いが分からない。特殊解としての面白さではなく、将来のスタンダードになり得る強さを提案してほしい。(千葉学)



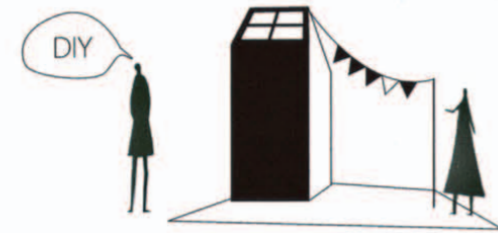
身の丈ハウス

次世代夫婦の住処

若い世代の価値観が変わりつつある。
車を買わなくなり、見かけの派手さではなく
本質的な物を求めるようになった。
そんな次世代の夫婦は今まで通りの家を
求めるだろうか。
自分たちが満たされる最低限の物を
身につけ、身の丈にあった生活を求める。
身の丈にあった小さな家、それは家というより
ペットに近い感覚かもしれない。

次世代夫婦

CAFE や映画館など家以外に居場所を見いだせる次世代の夫婦はワンルーム
マンション程度のスペースで十分な生活できるだろう。
また、DIY など今まで均質化されていた空間を自分達の好みに設える事に価値を
求めている。今までの大きく豪華な家や標準化されたマンションではなく、
身の丈に合った自分好みの家を求めている。
それは「家」というよりは「住処」に近いのかもしれない。



40坪の使い方

これまでの住宅のサイズは延べ床40坪というのが標準であった。
しかし、これまでの標準はもはや現況の標準とズレてきている。
次世代の夫婦は最低限のサイズで生活でき、標準はワンルームマンション
である約4坪といえる。
ニュータウンに増えつつある建て替え期を迎えた標準的な住宅の基礎を再利用し
身の丈に合った次世代の夫婦の住処を計画する。

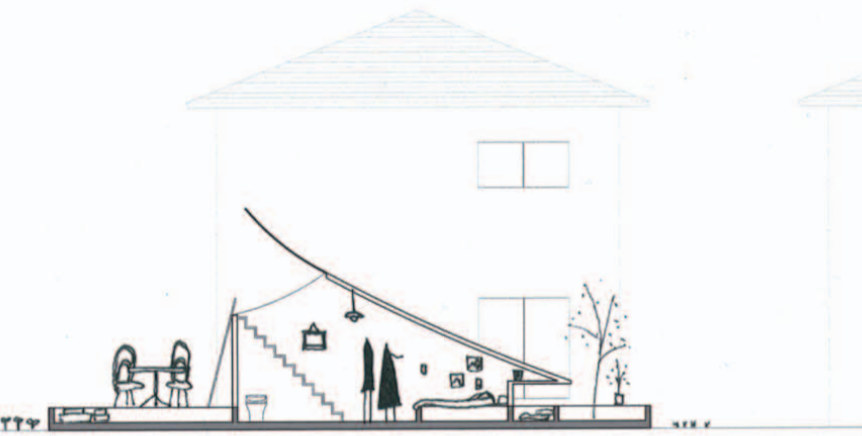


ペットのような家

小さな家はもはや家ではなくペットのような感覚なのかもしれない。
着せ替えたり、飾ったり夫婦で愛情をかけながら育てる家である。
ペットの様な家はいつもの道で出会う猫や犬の様につい気になってしまう。
人々の交流の中心となりうるペットのような家は町の小さなシンボルとなる。



section S=1:150



plan S=1:150

